巻　頭　言

総合科学研究科　研究科
安藤　正昭先生

川幕府が鉄をとても重要と考えていたのだと理解できました。

二．これは桜井家の当主が話されたことで記憶に残りました。桜井家の屋号が「屋」とすが、これは祖先が福島政則に随って広島に来たことに起因しています。ご存知のように、その後徳川家　家れ、桜井家の一番苦しい時が来まにあり、この苦しい時を忘れるな、という家訓として「可部屋」という屋号を使っているということです。

帰りのバスの中で、このプロジェクトで私自身何が出来るのか考環境と歴史を考えると、鉄の他に塩があり、塩からなら切り込んで行けると思い至りました。というのは四十年前、私の同級生（故人）が卒業研究で竹原のメダカを使て田に棲んでおり、高濃度の塩水に適応していました。あのメダカは今どうしてい　う日曜日に竹原に出かけてみました。メダカの遺伝子をとから、塩田の歴史（数百年で遺伝子が変わるか?）を知ることが出来るかもしれないと思ったからです。すると竹原の下水（とてもメダカが棲めるような環境ではない）にメダカのようなものが泳いでいました。早速採集して、研究室に持ち帰り調べてみると、一見メダカのように見えますがそれは「カダヤシ」でした。カダヤシは一九一六年に台湾から日本に移入され、卵胎生で、水草が無くても増えること、さら温が高くなっているので、南部日本では下水にもいるということでした。今は研究室でカダん坊が

す。

第二回目は「石見銀山巡検」でした。石見

ましたが、それ以上に印象深かったのが、群言堂（群言は中国語で、皆でワイワイという意味だそうです）を主催しておられる女性社長の言動です。私から見ると、彼女は一種の芸術家と見えました。彼女は事業としてやっているということでしたが、それもまた私には新鮮に響きました。というのも、二回の巡検を通して、少しこのプロジェクトの意味が私なりに理解できるようになってきたからです。一回目はたたおこし（吉田町）で、二回目は石見銀山が世界遺産に登録されることを受けての太田市の町おこしでした。現　しか見ていないように思われますが、これから地方がどうやって生きてゆくのか、さらにはどうやって元気に　21紀の課題です。そのとき、観光だけでは弱すぎると

デザイナーで、材料をす　て（石見）で調達し、自然というコンセプトを主張する集団で、何よりも雇用を創出しているのがすごい団であれば、地方か　か、できるのかもしれません。

翻って、大学も法人化以降、弱肉強食の時代に入りました。これまでの広島大学の方針を見ると、既存の価値観の下で何とか生き残ろうとしているように思われます。広島大学は新しい価値観を打ち出す必要があるのではないでしょうか?

アメリカだけが一人勝ちの世界はそのうち終わります。広島大学の理念の一番目に掲げてある「平和を希求する精神」とは、「弱者の目線でものを見ることが出来る」ということではないでしょうか?

このとき「地方」は大事なキーワードになります。地方が元気になるという動きと　なるという動きは似ています。圧倒一つの方向（勝ち組に有利な方向）に動いています。その中で、将来を予測し、現在の流れに逆らって一つの価値観を打ち出すのは大変だと思　大学の使命だと思います。

そして、中国・四国地方にする広島大学は、その期待に応え老い先短く、頭脳きていますので、若い学期待するしかありません。一緒に巡検に行った学生の中にも、輝く学生は数名いました。　学究科と総合科学部の学　のはかなり高く、直面する21世紀の課題を解決すと期待出来ます。